

## 社会的比較志向性と心理的特性との関連

### —社会的比較志向性尺度を作成して—

筑波大学心理学系 外山 美樹

The relation between social comparison orientation and psychological traits: Development of a Japanese version of the Social Comparison Orientation Scale

Miki Toyama (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

In this study, a Japanese version of the Social Comparison Orientation Scale (SCOS) was developed in order to investigate the relation between social comparison orientation and psychological traits. Factor analysis revealed that the SCOS consists of two factors: Ability comparison and opinion comparison. A correlation analysis of the psychological traits indicated that private and public self-consciousness were both positively related to social comparison orientation. Similarly, low independent self-construal and high interdependent self-construal were found to both be positively related to social comparison orientation. Multiple regression analysis indicated that neuroticism is strongly related to social comparison orientation.

**Key words:** Japanese version of the Social Comparison Orientation Scale, social comparison orientation, psychological traits.

社会的比較 (social comparison) とは、「自分と他者とを比較することの総称」と定義される (Festinger, 1954)。Festinger (1954) が社会的比較過程理論を提唱したのを契機に、社会的比較に関する研究は精力的に行われ、そこから態度変化とコミュニケーション、対人魅力と反感、競争と協同、集団の形成と構造など、広範にわたる社会的活動について数多くの仮説が導出されている (高田, 1987)。このように、Festinger (1954) が社会的比較過程理論を提唱してから半世紀の間に、社会的比較に関する研究は活発に行われ、その理論の妥当性を裏づける研究が蓄積されている一方、近年では、その理論を拡大、発展させた研究が進んでいる (e.g. Butler, 1989a, 1989b, 1992; Taylor & Lobel, 1989; Wood, 1989)。

また、最近になって、社会的比較を行う程度の個人差を測定しようとする試みもあがっている。Festinger (1954) の社会的比較過程理論の命題の1つである“他者と比較することによって、自分を知

ろうとする欲求は普遍的である”との考えに疑いの余地もないが、人が比較に基づいた情報を欲する欲求が生じる程度は、環境や状況によって変わってくるものと考えられる。例えば、ストレス状況下や新しい経験の時には、一時的に比較の量が増加することが報告されている (e.g. Buunk, 1994)。同様に、社会的比較に従事することは、時には社会的には受け入れられない側面をもつため、その程度には個人差が見られることが考えられる。

本研究では、Gibbons & Buunk (1999) が作成した社会的比較の志向性における個人差を測定する尺度である社会的比較志向性 (Social Comparison Orientation) 尺度の日本語版を作成することを第1の目的とする。この尺度は、“あまり自分と他の人を比べるほうではない (逆転項目)”などの項目から構成されており、他者と比較を行いやすいかどうかの傾向が測定される。Gibbons & Buunk (1999) は、847人のアメリカ大学生ならびに170人のオランダ大学生を対象に、最終的に11項目から成る社会的

比較志向性尺度を作成した。また、この尺度を因子分析(探索的因子分析, 確認的因子分析)したところ、両国ともに、Festingerの理論に対応した意見(opinion)と能力(ability)の2つの因子が抽出されたことが示された。そこで、本研究では、Gibbons & Buunk (1999)の社会的比較志向性尺度の日本語版を作成し、尺度の検討を行うことにした。

また、作成された社会的比較志向性尺度を用いて、個人の心理的特性との関連性を図ることを第2の目的とする。個人のある心理的特性が社会的比較を行いやすい傾向と関連があることは、多くの研究で示されているが(e.g. Hemphill & Lehman, 1991), 特に、自己についての不確かな特性(例えば、自尊感情が低い、自己概念が不安定など)との関連性が強いことがこれまで明らかになっている(e.g. Wayment & Taylor, 1995)。本研究では、個人の心理的特性として、「社会志向性」と「ネガティブな感情」をとりあげることにする。

まず、社会志向性としては、自己意識と相互独立の一相互協調的自己観に焦点を当てることにした。自己意識とは、自分の内面や外見に注意を向けやすい傾向のことであるが、特に他者から見られる自己の内面や他者に対する言動に注意を向けやすい傾向である公的自己意識とは大きな関連があるものと考えられる。また、自己を他者から独立したものとして捉える西欧文化に典型的な自己観である相互独立の自己観に対して、人間相互のつながりを重視し、関係のある他者と調和することが大切と考える相互協調的自己観を強く備えもつ人は、常に自己を他者と比較することが必要となってくるために、社会的比較志向性が強くなるものと考えられる。

ネガティブな感情の指標としては、自尊感情、抑うつ傾向、ならびに神経症傾向を取り上げることにした。自尊感情の低い人や抑うつ傾向の高い人は、自己についてより不確か(不安定)なため、自分についての情報を多く得るために社会的比較志向性が高いものと考えられる。また、神経症傾向の高い人は、自分の気分(mood)の状態についてより不明確である(Marsh & Webb, 1996)ため、社会的比較に従事しやすい傾向と関連があると考えられる。

高田(1992)、外山・伊藤(2001)も指摘しているように、一般に集団志向的である日本人においては、自己を他者と比較する社会的比較が多く生じ、また比較した結果が大きな意味をもつものと考えられる。そこで、日本人における社会的比較を理解するプロセスで、社会的比較を行いやすい程度を把握する社会的比較志向性尺度を作成し、その関連要因を探ることは非常に重要であり、今後の研究の布石になるものと考え

られる。

## 方 法

**被調査者** 大学生308名(男性113名, 女性195名, 平均年齢20.13歳)。なお、下記の質問紙(2)~(6)に回答した人数は、各々異なっており、詳細はTable 4に記載されている。また、87名の大学生には、約2ヶ月後の再テストにも参加してもらった。  
**質問紙** 以下の質問紙を用いた。

- (1) 社会的比較志向性尺度: Gibbons & Buunk (1999)によって作成された社会的比較志向性(Social Comparison Orientation)尺度を日本語に訳したものを使用した。11項目で構成されている。5段階評定(1~5点)で、得点が高いほど社会的比較志向性が高いことを示す。
- (2) 相互独立の一相互協調的自己観尺度: 高田・大本・清家(1996)の尺度を用いた。相互独立の自己観と相互協調的自己観の下位尺度から成る。相互独立性10項目、相互協調性10項目の計20項目から構成され、5段階評定(1~5点)であった。
- (3) 自己意識尺度: Feningstein, Scheier & Buss (1975)による自己意識尺度を翻訳したものを用いた。翻訳には辻(1993)と押見・渡辺・石川(1986)および菅原(1984)を参考にした。原尺度は、「私的自己意識」、「公的自己意識」ならびに「社会的不安」の3つの下位尺度から構成されているが、本研究ではこのうち「私的自己意識」下位尺度9項目、「公的自己意識」下位尺度6項目を用いた。5段階評定(1~5点)であった。
- (4) 自尊感情尺度: Rosenberg (1965)による自尊感情尺度の日本語版(桜井, 1993)を用いた。10項目で構成されており、4段階評定(1~4点)であった。
- (5) 抑うつ傾向尺度: Zung (1965)が開発したSDS (Self-rating Depression Scale)の日本語版(福田・小林, 1973)を用いた。20項目で構成されており、4段階評定(1~4点)であった。
- (6) 神経症傾向尺度: 和田(1996)によるBig Five尺度の中の「情緒不安定性」下位尺度を用いた。12項目で構成されており、5段階評定(1~5点)であった。

**手続き** 上記の質問紙の一部を被調査者に集団形式で実施した。

結果と考察

(1) 社会的比較志向性尺度について

社会的比較志向性尺度11項目について、Gibbons & Buunk (1999) に準拠し、主因子法、バリマックス回転による探索的因子分析を行い、固有値1.0以上の2因子を抽出した (Table 1 参照)。第1因子は、“あまり自分と他の人を比べるほうではない (逆転項目)”，“他の人のやり方と比べて自分のやり方はどうであるかいつも気にしている”などの項目が高い負荷を示していることから「能力比較」と命名した。そして、第2因子には、“何かにについてもっと知りたいと思うとき、それについて他の人が何を考えているのかを知ろうとする”，“自分と似たような問題に直面している人が、何を考えているのかをよく知ろうとする”などの項目が高い負荷を示していることから「意見比較」と命名した。2因子による累積負荷率は40.24%であった。

本研究で得られた2因子構造は、ほぼGibbons & Buunk (1999) の結果と同様であったが、多少異なるところもあった。項目11 (「自分の境遇と他の人の境遇の違いを決して考えたりはしない (逆転

項目)」) は、Gibbons & Buunk (1999) の結果では第2因子に高い負荷量を示したが、本研究においては、第1因子に高い負荷量を示した。また、項目9 (「私は、他の人だったら同じ状況でどうするかをいつも知りたい)」) においては、Gibbons & Buunk (1999) の結果では第2因子のみに高い負荷量を示したが、本研究では、第1因子と第2因子の両方に高い負荷量を示した。これらの違いが、文化差によるものなのかどうかを、今後詳細に検討していかなければならない。

なお、社会的比較志向性尺度が1因子が妥当か2因子が妥当かを調べるために<sup>1)</sup>、確認的因子分析を行った。まず、2因子モデルとしては、2因子に相関を仮定しないモデル (2因子無相関モデル) と2因子間に相関を仮定するモデル (2因子相関モデル) の2つを設定し、さらに1因子モデルの合計3つのモデルの中でどれが1番最適なモデルであるのかを検討した。その結果、GFI, AGFIともに.90以上であった2因子相関モデルを採用するのが1番妥

1) 回転後の「能力比較」と「意見比較」の相関係数は、.30 ( $p < .01$ ) であった。

Table 1 社会的比較志向性尺度各項目の基礎統計ならびに因子分析の結果

No.	質 問 項 目	M	SD	抽出因子		h <sup>2</sup>
				1	2	
X5	あまり自分と他の人を比べるほうではない (R)	3.40	1.16	<b>.79</b>	.09	.63
X2	他の人のやり方と比べて自分のやり方はどうであるか、いつも気にしている	3.56	1.15	<b>.71</b>	.16	.53
X3	何かに対して自分がどのくらいうまくできたのかを知りたいときには、他の人のやったことと自分のやったことを比べる	3.49	1.09	<b>.67</b>	.22	.50
X6	今まで自分がやりとげたことについて、他の人とよく比べる	3.06	1.14	<b>.62</b>	.12	.41
X4	自分がどのくらい社会的であるかを、他の人とよく比べる	3.34	1.21	<b>.62</b>	.12	.40
X1	自分の親しい人の状況と、他の人の状況をよく比べる	3.19	1.23	<b>.60</b>	.03	.37
X11	自分の境遇と他の人の境遇の違いを決して考えたりはしない (R)	3.81	.96	<b>.45</b>	.12	.22
X10	何かにについてもっと知りたいと思うとき、それについて、他の人が何を考えているのかを知ろうとする	3.62	1.06	.22	<b>.61</b>	.41
X8	自分と似たような問題に直面している人が、何を考えているのかをよく知ろうとする	3.81	.98	.27	<b>.59</b>	.41
X7	他の人とお互いの意見や経験について話すのが好きだ	3.94	1.01	-.06	<b>.41</b>	.17
X9	私は、他の人だったら同じ状況でどうするかをいつも知りたい	3.37	1.13	<b>.45</b>	<b>.43</b>	.39
寄与率 (%)				29.23	11.01	
累積寄与率 (%)				29.23	40.24	

Note) (R) は、逆転項目を示す。n=308.

Table 2 社会的比較志向性尺度の因子モデルの比較

モデル	適合度統計量						
	$\chi^2$	df	GFI	AGFI	AIC	CAIC	RMSEA
2 因子相関モデル	83.40	28	.95	.90	137.40	265.12	.08
2 因子無相関モデル	121.07	29	.93	.87	173.07	296.05	.10
1 因子モデル	169.53	38	.91	.84	225.53	357.98	.11

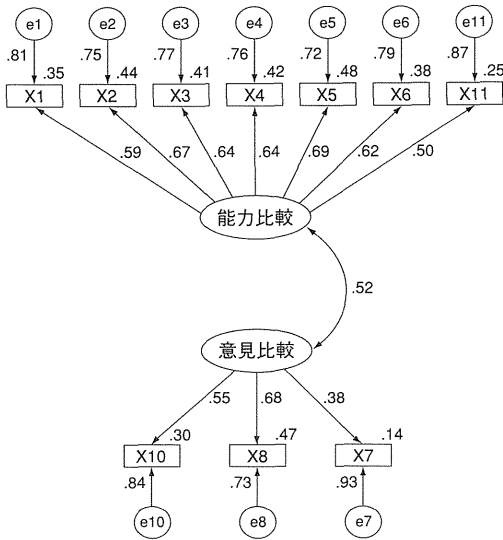


Fig. 1 社会的比較志向性尺度の2因子相関モデル

当との結論を得た (Table 2 参照)。なお、このモデルの適合度は、GFI = .95, AGFI = .90,  $\chi^2=83.40$  ( $df=28$ ), AIC = 137.40, RMSEA = .08であった。社会的比較志向性尺度の2因子相関モデルのパス図が Fig. 1 に示されている。「能力比較」と「意見比較」との間に.52という正の相関係数が見られ、先行研究 (Gibbons & Buunk, 1999) と同様に、社会的比較志向性尺度は、関連性の高い2因子から構成されていることが明らかにされた。

探索的因子分析の結果に基づき、各因子に高い負荷量を示す項目 (Table 1 に示された項目) で下位尺度を構成した。項目9 (「私は、他の人だったら同じ状況でどうするかをいつも知りたい」) においては、2つの因子に、40以上の負荷量を示したため、2つの下位尺度からは除外された。以降の分析では、「能力比較」下位尺度、「意見比較」下位尺度、および全項目11項目を足し合わせた社会的比較志向性 (全体) 尺度で検討していくことにした。

社会的比較志向性 (全体) 尺度得点の平均 (SD) は、38.59 (7.31)、能力比較下位尺度得点の平均

Table 3 国別における社会的比較志向性 (全体) 尺度得点の平均値 (M) と標準偏差 (SD)

	n	M	SD
オランダ	599	38.05	6.79
アメリカ	2460	39.75	6.39
日本	308	38.59	7.31

Note1) オランダとアメリカのデータは、Gibbons & Buunk (1999) による。

Note2) 被調査者は、すべて大学生である。

(SD) は、23.86 (5.64)、さらに意見比較下位尺度得点の平均 (SD) は、11.38 (2.23) であった。下位尺度の項目数が異なるので、項目平均に直したところ、能力比較下位尺度で3.41、意見比較下位尺度で3.79であった。このことより、われわれ日本人においては、能力に基づいた比較よりも意見に基づいた比較が行われやすいことが示唆される。全体尺度ならびに下位尺度の男女差を *t* 検定で検討したところ、意見比較下位尺度で女性が高かった ( $t=2.32, p<.01$ )。

また、オランダ人、アメリカ人、そして日本人の社会的比較志向性 (全体) 尺度得点において差が見られるのかどうかを一要因分散分析により検討したところ (Table 3 参照)、有意な差が認められ ( $F(2, 3364)=18.43, p<.01$ )、多重比較 (Tukey法) の結果、アメリカにおける社会的比較志向性 (全体) 尺度得点がオランダ、日本のそれよりも高いという結果が得られた。一般に、集団志向的で周囲との調和や一致を重んじると言われる日本人においては、他者と比較する傾向が強いものと予想されたが、本研究においてはそのような予測は支持されなかった。しかし、この結果の解釈には慎重にならざるを得ないであろう。われわれ日本人においては、前段落の結果も併せて考えると、能力に基づく比較よりも意見に基づく比較が顕著である可能性が考えられるが、本研究においては、下位尺度別における比較がされていない<sup>2</sup>。さらに項目内容が、より欧米向きである

2) アメリカとオランダのデータが、下位尺度別に検討されていないため、本研究でも、社会的比較志向性 (全体) 尺度のみの比較検討となった。

Table 4 各尺度の基礎統計ならびに社会的比較志向性尺度との相関係数

尺度	M	SD	項目数	α 係数	n	相関係数		
						社会的比較志向性(全体)	能力比較	意見比較
私的自己意識	37.34	6.10	10	.79	187	.39**	.31**	.38**
公的自己意識	25.75	4.50	7	.79	194	.56**	.58**	.21**
相互独立性	32.03	5.95	10	.78	196	-.29**	-.39**	.13
相互協調性	36.04	4.44	10	.63	197	.49**	.52**	.12
自尊感情	27.61	5.64	10	.85	307	-.18**	-.25**	.12*
抑うつ傾向	39.93	7.93	20	.81	111	.23**	.30**	-.01
神経症傾向	42.59	10.03	12	.92	111	.62**	.64**	.23*

Note) \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ .

という問題点も考えられる（たとえば，“自分がどのくらい社会的であるかを，他の人と比べる”など）。こうした問題点を吟味しつつ，文化比較については，慎重に検討，議論しなくてはならないであろう。

次に，尺度の内的一貫性を検討するために，Cronbachのα係数を算出したところ，社会的比較志向性（全体）尺度で.82であり，能力比較下位尺度で.84，意見比較下位尺度で.68であった。意見比較下位尺度のα係数の値が低く，今後は項目数を増やすなどの改善が望まれる。また，再検査信頼性係数を求めたところ，社会的比較志向性（全体）尺度で，.67 ( $p < .01$ )，能力比較下位尺度で.78 ( $p < .01$ )，意見比較下位尺度で.72 ( $p < .01$ )であった。これらのことより，本尺度の信頼性は概ね確認されたと言えよう。

(2) 社会的比較志向性と社会志向性との関連性

私的・公的自己意識尺度，相互独立性，相互協調性尺度の平均，標準偏差，ならびにα係数がTable 4に示されている。各々の尺度と社会的比較志向性（全体）尺度ならびに下位尺度との相関を見たところ（Table 4参照），私的自己意識とは.31～.39 ( $p < .01$ )，公的自己意識とは.21～.58 ( $p < .01$ )であった。予想通り，社会的比較志向性，特に能力に関する社会的比較志向性は，公的自己意識と強い関連性があることがわかった。

また，相互独立－相互協調的自己観尺度における相互独立性，相互協調性では，社会的比較志向性（全体）尺度ならびに能力比較下位尺度との間において有意な相関係数が認められたが（相互独立性：順に-.29，-.39， $p < .01$ ，相互協調性：順に.49，.52， $p < .01$ ），意見比較下位尺度との間には無相関を示した。以上のことより，自己を他者から独立した独自の実態と捉える相互独立的自己観を備え持つ人は，能力に基づいた他者との比較を行いにくく，

Table 5 群別における社会的比較志向性尺度得点の平均値 (M) と標準偏差 (SD)

群	n	M	SD
LL	46	31.54	.83
LH	36	33.78	.94
HL	32	32.03	.99
HH	70	39.50	.67

Note) LL群：私的自己意識低群＋公的自己意識低群  
 LH群：私的自己意識低群＋公的自己意識高群  
 HL群：私的自己意識高群＋公的自己意識低群  
 HH群：私的自己意識高群＋公的自己意識高群

自己を他者と互いに結びついた人間関係の一部として捉える相互協調的自己観を強く備え持つ人は，能力に基づいた他者との比較を行いやすい傾向を持っていることがわかった。

次に，私的自己意識尺度得点の平均値 (37.34)，公的自己意識尺度得点の平均値 (25.75) に基づいて各々高群，低群を設け，それらの組合せにおいて4群を設定し，社会的比較志向性（全体）尺度を従属変数とする一元配置の分散分析を実施した<sup>3)</sup>。各群における社会的比較志向性尺度得点の平均値がTable 5に示されている。その結果，群間における差が見出され ( $F(3, 180) = 24.30, p < .01$ )，多重比較 (Tukey法) を行ったところ，私的，公的自己意識がともに高い群 (HH群) が他の3群よりも社会的比較志向性が高いことが明らかにされた (Fig. 2

3) 私的自己意識尺度，公的自己意識尺度いずれにおいても性差が認められなかったため，男女を込みにした一元配置の分散分析を実施した。

4) 能力比較下位尺度，意見比較下位尺度を従属変数とする同様の分析を行ったところ，社会的比較志向性（全体）尺度とはほぼ同様の結果を得たため，本研究においては，社会的比較志向性（全体）尺度の結果のみを言及することにした。

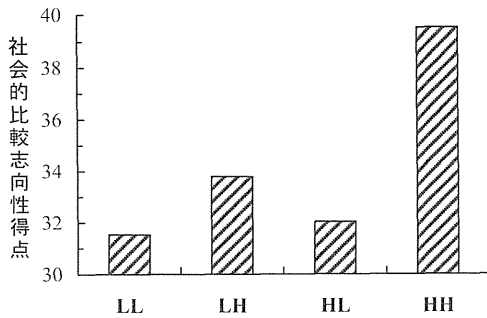


Fig. 2 私的・公的・自己意識によるタイプ別における社会的比較志向性の平均値

Note) LL 群：私的・低+公的・低  
 LH 群：私的・低+公的・高  
 HL 群：私的・高+公的・低  
 HH 群：私的・高+公的・高

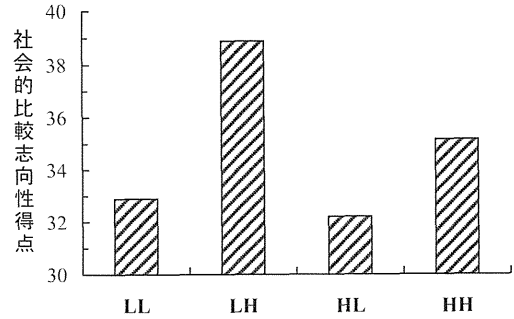


Fig. 3 相互独立性・相互協調性によるタイプ別における社会的比較志向性の平均値

Note) LL 群：独立性低+協調性低  
 LH 群：独立性低+協調性高  
 HL 群：独立性高+協調性低  
 HH 群：独立性高+協調性高

参照)<sup>4</sup>。このことより、社会的比較志向性が高いのは、私的、公的・自己意識がともに強い傾向を持っているものであることが明らかにされた。

同様に、相互独立-相互協調的自己観尺度における相互独立性、相互協調性尺度得点においても、平均値（順に、32.03、36.04）に基づいて、高群、低群を設け、それらの組合せにおいて4群を設定し（Table 6 参照）、社会的比較志向性（全体）尺度を従属変数とする一元配置の分散分析を実施した<sup>5</sup>。その結果、群間における差が見出され（ $F(3, 191)=17.06, p<.01$ ）、多重比較（Tukey法）を行ったところ、相互独立性が低く相互協調性が高い群（LH群）が他の3群よりも社会的比較志向性が高いという結果が得られた（Fig. 3 参照）<sup>6</sup>。このことより、相互独立性が低く相互協調性が高いというわれわれ日本人に典型的なタイプが、より他者との比較に従事しやすい傾向をもっていることが示された。

### (3) 社会的比較志向性とネガティブな感情との関連性

自尊感情尺度、抑うつ傾向尺度、ならびに神経症

- 5) 独立相互性において、性差が見られたため、性を要因に加えた2要因分散分析を試みたが、1セル10人みたないところもあったため、本研究においては、男女を込みにした一元配置の分散分析を実施した。
- 6) 能力比較下位尺度、意見比較下位尺度を従属変数とする同様の分析を行ったところ、能力比較下位尺度においては、社会的比較志向性（全体）尺度とほぼ同様の結果を得た。意見比較下位尺度においては、群間における有意な差が認められなかった。

Table 6 群別における社会的比較志向性尺度得点の平均値 ( $M$ ) と標準偏差 ( $SD$ )

群	$n$	$M$	$SD$
LL	38	32.90	.94
LH	70	38.89	.69
HL	62	32.21	.73
HH	25	35.16	1.16

Note) LL 群：相互独立性低群+相互協調性低群  
 LH 群：相互独立性低群+相互協調性高群  
 HL 群：相互独立性高群+相互協調性低群  
 HH 群：相互独立性高群+相互協調性高群

傾向尺度の平均、標準偏差、および $\alpha$ 係数がTable 4に示されている。次に、各々の尺度と社会的比較志向性（全体）尺度ならびに下位尺度との相関係数を求めた。その結果、自尊感情と社会的比較志向性（全体）尺度、能力比較下位尺度との間には負の相関係数が得られたが（順に、 $-.18, -.25, p<.01$ ）、意見比較下位尺度との間には正の相関係数が見られた（ $.12, p<.05$ ）。ここで能力比較下位尺度と意見比較下位尺度でその影響面が異なるという事実は注目に値する。この結果は、自尊感情が低い人はそうでない人よりも能力に基づいた比較に従事しやすいが、意見に基づいた比較には従事しないことになる。自尊感情が低い、すなわち自己概念が不安定な人は、特に、自己に関連した情報に興味を持っている可能性が指摘されるが、さらなる研究が必要とされよう。

また、神経症傾向尺度との間にはすべて有意な正の相関係数が見られたが（順に、 $.62, .64, .23, p<.05$ ）、意見比較下位尺度との間の相関は非常に弱いものであった。抑うつ傾向尺度とは社会的比較志向

性（全体）尺度ならびに意見比較下位尺度との間に有意な正の相関係数が見られたが（順に、.23, .30,  $p < .01$ ），意見比較下位尺度との間には無相関を示した。

次に、自尊感情、抑うつ傾向、ならびに神経症傾向の中で、どれが1番社会的比較志向性と関連があるのかを検討するために、社会的比較志向性（全体）尺度を基準変数、自尊感情、抑うつ傾向、神経症傾向を説明変数とする重回帰分析を行った<sup>7</sup>。まず、重回帰式は有意であった（ $R^2 = .39$ ,  $p < .01$ ）。有意な標準偏回帰係数（パス係数）は、神経症傾向からのパスのみであった（ $\beta = .66$ ,  $p < .01$ ）。Costa & McCrae（1985）は、自尊感情と抑うつ傾向は、上位概念である神経症に包括されることを提唱しているが、本研究においても、神経症傾向が社会的比較志向性に大きく影響を与えていることが明らかにされた。

### まとめと今後の課題

本研究では、Gibbons & Buunk（1999）が作成した社会的比較志向性尺度の日本語版を作成することを第1の目的とした。本研究の結果より、社会的比較志向性尺度は、先行研究（Gibbons & Buunk, 1999）と同様に、関連性の高い2つの下位尺度（「能力比較」と「意見比較」）から構成されていることが明らかにされた。また、本尺度の信頼性も概ね確認された。

次に、本研究で作成された社会的比較志向性尺度を用いて、個人の心理的特性との関連を検討した。その結果、全体的に、自分を私的、公的ともに意識することが多く、他者との親和や協調を重視する日本文化に一般的な相互協調的自己観の高い人が、他者との比較の志向性が高いことが示された。また、自尊感情が低く、抑うつ傾向が高く、神経症傾向の高い人が、社会的比較志向性が強いが、その中でも特に神経症傾向との関連性が強いことが示された。これらの結果は予測を支持するものであり、社会的比較志向性尺度の構成概念妥当性が確認されたと言える。

また、社会的比較志向性尺度の下位尺度である能力比較下位尺度と意見比較下位尺度はその影響面でも多少異なっており、両者の独自性が明らかにされた。しかしながら、能力比較と意見比較では、比較

プロセスの性質が異なるので（Festinger, 1954）、社会的比較をさす場合、「能力比較」のみをその概念として捉えたほうが妥当ではないかという懸念もある。事実、社会的比較志向性（全体）尺度との相関係数は、意見比較下位尺度（.60,  $p < .01$ ）よりも能力比較下位尺度（.94,  $p < .01$ ）のほうが高かった。本研究では、Gibbons & Buunk（1999）の社会的比較志向性尺度をそのまま翻訳した日本語版を作成したが、今後はこうした視点も含めた尺度の充実化が望まれる。

さらに今後の課題としては、社会的比較志向性尺度を用いての応用的研究が望まれる。例えば、Kulik & Mahler（1997）は、社会的比較が、病気や手術のようなストレスにおけるコーピングの1つであることを指摘している。また、社会的比較のプロセスは学業成績や学習に影響をもたらすことも明らかにされている（Blanton, Buunk, Gibbons & Kuper, 1999）。今後は、社会的比較に関する応用的な研究として、こうした健康心理学や教育心理学で扱われる現象を、本尺度を用いて追求していきたい。

### 引用文献

- Butler, R. 1989a Interest in the task and interest in peers' work in competitive and noncompetitive conditions: A developmental study. *Child Development*, **60**, 562-570.
- Butler, R. 1989b Mastery versus ability appraisal: A developmental study of children's observations of peers' work. *Child Development*, **60**, 1350-1361.
- Butler, R. 1992 What young people want to know when: Effects of mastery and ability goals on interest in different kinds of social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 934-943.
- Buunk, B.P. 1994 Social comparison processes under stress: Towards an integration of classic and recent perspectives. In W. Stroebe & M. Hewstone (Eds.), *European review of social psychology*. Vol.5. Chichester, England: Wiley. Pp.211-241.
- Blanton, H., Buunk, B.P., Gibbons, F.X. & Kuyper, H. 1999 When better-than-others compares upward: Choice of comparison comparative evaluation as independent predictors of academic performance. *Journal of Personality and Social Psychology*.

7) 意見比較下位尺度とは、有意な相関係数が得られないものもあったため、重回帰分析においては、社会的比較志向性（全体）尺度においてのみ検討することにした。

- Costa, P.T., Jr. & McCrae, R.R. 1985 Hypochondriasis, neuroticism, and aging: When are somatic complaints unfounded? *American Psychologist*, **40**, 19-28.
- Fenigstein, A., Scheier, M.F. & Buss, A.H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison process. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- Gibbons, F.X. & Buunk, B.P. 1999 Individual differences in social comparison: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 129-142.
- Hemphill, K.J. & Lehman, D.R. 1991 Social comparisons and their affective consequences: The importance of comparison dimension and individual difference variables. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **10**, 372-394.
- Kulik, J.A. & Mahler, H.I.M. 1997 Social comparison, affiliation, and coping with acute medical threats. In B.P. Buunk & F.X. Gibbons (Eds.), *Health, coping, and well-being: Perspectives from social comparison theory*. Mahwah, NJ: Erlbaum. Pp.411-432.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Marsh, K.L. & Webb, W.M. 1996 Mood uncertainty and social comparison: Implications for mood management. *Journal of Social Behavior and Personality*, **11**, 1-26.
- 押見輝男・渡辺浪二・石川直弘 1986 自己意識尺度の検討 立教大学心理学科研究年報, **28**, 1-15.
- 桜井茂男 1993 自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み 奈良教育大学教育研究所紀要, **29**, 203-208.
- 菅原健介 1984 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- 高田利武 1987 社会的比較の発達過程に就て—文献的考察— 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, **36**, 349-362.
- 高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社  
高田利武・大本美千恵・清家美紀 1996 相互独立の一相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成 奈良大学紀要, **24**, 157-173.
- Taylor, S.E. & Lobel, M. 1989 Social comparison activity under threat: Downward evaluation and upward contacts. *Psychological Bulletin*, **90**, 245-271.
- 外山美樹・伊藤正哉 2001 児童における社会的比較の様態 (2)—パーソナリティ要因の影響— 筑波大学発達臨床心理学研究, **13**, 53-61.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房  
和田さゆり 1996 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67.
- Wayment, H.A. & Taylor, S.E. 1995 Self-evaluation process: Motives, information use, and self-esteem. *Journal of Personality*, **63**, 729-757.
- Wood, J.V. 1989 Theory and research concerning social comparisons of personal attributes. *Psychological Bulletin*, **106**, 231-248.
- Zung, W.W.K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.